



<研究ノート>約束の書物が語ること : 『ハロルド・フレデリック・ウッズウォース博士追憶集』

著者	森田 由利子
雑誌名	Ex : エクス : 言語文化論集
号	11
ページ	231-249
発行年	2019-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028427

約束の書物が語ること

— 『ハロルド・フレデリック・ウッズウォース博士追憶集』

森 田 由利子

I. 序

『ハロルド・フレデリック・ウッズウォース博士追憶集』¹⁾ (*In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D.D.*) は、寿岳文章 (1900-1992) の手によって創られ、1952年 (昭和27年)²⁾ に刊行された小さな本である。1939年 (昭和14年) 2月6日、55歳の若さで急逝した恩師ウッズウォース博士 (1883-1939) の追悼集であり、カナダへ帰国したウッズウォース夫人の切なる願いを受け、寿岳が刊行責任者となり、同年12月に出版企画が発表されている。しかし、その後、実に12年の年月を経て、ようやく制作が実行に移され、書物の形と成るに至ったのである。部数が限られた限定版の私家本で、見開き扉の左にはウッズウォース博士の写真が配され、向き合う右ページの上部に書名、そしてその下に「お教を受けた学生の1人によって編纂 1952年」 (“Edited by One of his former students MCMLII”) とある (図1)。寿岳自らの名は、本書40頁の最後に“B. J.”とだけ記され、本文が終わった後の、書物制作に関わる簡潔な情報の中に「本の装幀をした」人物としてその名が出てくるだけである。

1) 寿岳文章は、同書送付時に同封したと思われる書面において『ウッズワース先生追憶集』、あるいは『故ウッズワース博士追憶集』と称している。本稿においては、以後、『ウッズウォース博士追憶集』と表記する。

2) 寿岳文章・しづ著作集の巻末の年譜には1951年 (昭和26年) に向日庵私版から刊行とされている (『ある夫婦の記録』387)。

ただ、見開き扉をめくった次の頁、H. W. アウターブリッジ 関西学院大学第7代院長（1886-1976）によって書かれた序文には、寿岳（“Professor Jugaku”）の労を称え、彼の名が明記されている。少し長い英文とはなるが、この序文は、本書の刊行に関する概要を簡潔に伝えているため、下記にその全文を引用したい。

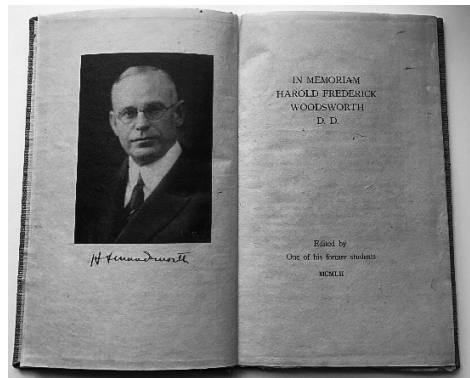


図1 見開き扉

It is a great joy and satisfaction to me that at long last the Woodsworth Memorial Booklet is to be published. All plans for its publication were made within a few months of the death of Dr. Woodsworth. But before they could be consummated the second world war had begun and they had to be postponed. For several years those interested friends on both sides of the Pacific who were backing the enterprise were unable to communicate with one another; and when the war was over, for several years the materials for the sort of booklet planned were entirely unavailable. Japanese hand-made paper was not being produced and the materials desired for the cover could not be procured. So, nearly twelve years have gone by with the plan uncompleted.

It has now become possible however to fulfil this sacred trust, and the many friends of Harold Woodsworth will rejoice. We feel sure that it would have been his own wish to have the book printed in harmony, in part at least, with Japanese artistic standards.

The major credit for this little work of love must go to Professor Jugaku, who through all the long years has faithfully treasured the manuscripts, and has taken the major responsibility for the printing.

序文に記されているように、『ウッズウォース博士追憶集』の企画は、第二次世界大戦のため延期を余儀なくされ、その後、ウッズウォース博士の死を悼み、追悼集の刊行を望む知友は太平洋に隔てられ、互いに連絡が取れなくなった。そして、ようやく過酷な戦争が終わった後も、寿岳の書物造りのために必要な手漉き和紙や表紙の材料を入手することが困難になってしまったという³⁾。それ故、更に数年の時を有したのである。彼は戦争を挟む長い年月の間、手書き原稿を守りぬいたと序文には記されている。

「わがことながら—十二年ぶりにつくりあげた約束の本」(1965)と題されたエッセイの中で、寿岳自ら、この追悼集出版の経緯や制作、および刊行が極めて困難であったことについて書いている。そして、「責任をはたしぬく念願を、小さいながら貫きとおしたかった」(928)と述べているのである。発行の翌年、1953年に書かれた刊行記においても「私は一旦約束したことに対して、あくまで責任を負おうと決心した」と記している⁴⁾。「固く誓った約束(“sacred trust”)」を果たしたこの本は、小さい書物ながら、余りにも奥深く、多くを語る。未だその全容を探ろうとし始めたばかりではあるが、現段階までに知り得たことを綴ってみたい。

3) 寿岳自身の随筆「わがことながら」によると、実際は、戦前の段階で、本文用紙と装幀材料の準備は出来ていたようである(928)。

4) 後述する「『ウッズウォース博士追憶集』刊行記」(7)。

II. 『ウッズウォース博士追憶集』の構成と内容

H. F. ウッズウォース初代法文学部長の早過ぎる死は、「ウッズウォース部長突如逝く一輝く功績、惜しまれる人格」という見出しで、逝去の2日後、『関西学院新聞』の号外が出て大きく報じられている。C. J. L. ベーツ第4代院長(1877-1963)が「学院にとって大変な損失」であると語り、「英文学者であると共に熱心な宗教的人格者であり…いつも変らぬ親切さを以て大小に拘らず仕事に対して忠実で忍耐力の強い方であった」⁵⁾とウッズウォース博士の人柄を偲んでいる。実際、彼の急逝の後、いち早く追悼集発行の企画の声があがり、翌年の4月末までに百数十名の予約申し込みがあったということからも、その人望の厚さがうかがわれる⁶⁾。寿岳自身、「私にとっては、いちばんしたわしい恩師である」⁷⁾と述べているほどである。1934年の関西学院大学開設と同時に法文学部教授となった竹友藻風(1891-1954)も、「血色の宜い、^{せい}丈の高い、声の朗らかな先生が僅か数分間に不帰の客となられやうとは今尚信ぜられない…着流しの上にトンビを引かけて駆けつけたのであるが、その時は既に三十分の後であつた」(198)と、その衝撃の深さを記し、「暗然とした心の中」に思い出されたウッズウォース博士の「にこやかな顔」と「一切を信頼し切った慈父のやうなまなざし」(198)に言及している。また、「どんな事を言つても拒絶せられたことはなく、否定せられたこともなかった」とし、博士の人柄を偲ばせるある出来事を記している—「大阪の街を歩いてゐられる時、少し酔の廻つた紳士がやって来て、彼の所謂“Japan-made English”を盛にまくし立てるのを少しもいとはれず、丁寧に対応してゐられた」(199)。いずれも、追悼集刊行が切に望まれた所以が良くわかる言葉である。

夫人へ贈ることを第一義としており、また、多くの英語による回想、英文の文献

5) 旧字体で書かれている漢字を筆者が当用漢字に変換して引用している。本稿における以下の引用においても、旧漢字に関しては同様のこととする。

6) 『ウツワース博士追憶集』刊行記(7)。

7) 「わがことながら」(927)。

や手紙を引用する必要性のためであろうが、『ウッズウォース博士追憶集』は、全て英語で書かれている。前述の「序文（“Foreword”）」の後、7頁から52頁までが本文であり、構成は、2つに分かれている。まず、ウッズウォース博士の伝記的事実が、博士と縁ある多くの人々による言葉や彼らの手紙を織り交ぜながら年代順に描かれている。1883年にカナダのマニトバ州の小さな都市で、6人兄弟の5番目として生まれたことから始められ、恩師や夫人らによる回想や、唯一残っているウッズウォース博士が若き頃に創った英詩（「秋’“Autumn”」）の引用、来日後、長崎や鹿児島で英語教師を始めたこと、関学に着任した頃についての博士自身の回想録（“My Early Recollections of Kwansei Gakuin”）⁸⁾、文学作品に対する博士の貴重なエッセイ、宣教師としての活動の記録、突然の死、関西学院大学で行われた葬儀の様子などが綴られる。そして、遺骨が東京の青山霊園外人墓地の一角に埋葬されたことが記されて、寿岳による本文は終わっている。そして、続く41頁には、「感謝や賞賛の言葉と思い出（“Tributes and Recollections”）」と標題が付けられ、先の本文を補うかのように、ウッズウォース博士の友人たちによる文章や手紙が数多く並べられているのである。手紙からの直接引用を多く挿入することは、「ライフ・ライティング」ジャンルにおいてよくみられることであるが、伝記作者が語らずとも、実際の「手紙の言葉」が自ら雄弁にウッズウォース博士についての物語を語ってくれるのである。

今回、刊行直後の周囲の反応や書評などの文献を探そうと試みたが、未だ見つけられていない。後述する寿岳に寄せられた手紙以外に、唯一探し得たのは、当時の文学部教授、志賀勝（1892-1955）が「英米文学会会報」創刊号（1953）に掲載した一文だけである。「ウヅワアス先生追想録 “In Memoriam H. F. Woodsworth”」と題された短い文章であるが、追憶集の内容を簡潔に伝えてくれる。

これは寿岳文章君が先生の思い出を、その伝記に即しながら英文で書きとめたもの。

かずかずの心のこもった手紙や、重要なエッセイの類まで採録されている。後半には

8) 1937年3月に刊行された『関西学院文学部同窓会報』に掲載されている。

先生の友人達の思い出が添えてある。夫妻の写真や好んだ風景まで入れて、先生の面影はこの一卷に十分写しだされているとあってよい。これは寿岳君一流の丹念な良心的な書物で発行のおくれただけ、その苦心のひどかったことが察せられるが、これだけのものがついに出来あがったことを祝いたい。(2)

上記の引用で言及されているように、本文中には、ウッズウォース博士直筆のメモの写真、応接間でくつろぐ夫妻の写真、学生の1人によって描かれたウッズウォース博士の似顔絵のスケッチ、博士が好んだゴルフコースの景色の写真が散りばめられ、より魅力的な書物となっているのである。

紙幅の都合上、本文の興味深い内容を一つひとつ詳細に記すことはできないのであるが、特に触れておきたいのは、やはり『ウッズウォース博士追憶集』から伝わってくる博士の教育者としての姿勢と人柄であろう。一例を挙げるならば、「彼はアドヴァイスを求めに来る全ての学生を常に助け、そして、卒業生から受け取った如何なる手紙に対しても返信を怠ることはなかった(“He was a constant helper to every student who came to him for advice, and he was never negligent in replying to any letters he received from graduates”)」(16)と記されている。これは至極当たり前のようであり、なかなか難しいことである。そして博士が如何にかつての学生に対して、自然に、かつ、思い遣り深く接したかの証左となる手紙のやり取りがその後に引用されている。

さらに、もう一つ、追憶集から知り得たのは、ウッズウォース博士が有していた英文学の知識と理解の深さである。寿岳は「英文学の手ほどきをして下さった私の恩師」と博士を称している。また、「博士にはまとまつた著述がなくその一生は全く教育事業にささげられた」が、「文学に対する理解は深く」、「感受力」も強かったと書いている⁹⁾。事実、博士が英詩に限らず、刊行間もない英国作家 ヴァージニア・ウルフ(1882-1941)の長編小説『歳月』(*The Years*, 1937)に興味を持ち、考察

9) 『ウズワース博士追憶集』刊行記(7)。

していたという記載には驚かされた。竹友藻風によると、ウッズウォース博士は、1938年4月に「神戸ウィメンズクラブ（“Kobe Women’s Club”）」において、『歳月』について講義を行ったという¹⁰。そして、その講義の概要をまとめたエッセイが『ウッズウォース博士追憶集』に採録されているのである（21-26）。作者のヴァージニア・ウルフ、そして、近年評価が高まっている彼女の晩年作『歳月』に関する博士の見解は極めて鋭く、大変興味深いものである。

Ⅲ. 本の装幀一用と美

寿岳文章の数多の書物論を読むと、彼が当時の書物の装幀の状況に不満を持っていたことは明白である。寿岳は、「作家と装幀」（1934）において、「あらゆる工芸は、それ自体の内在性から用と美に奉仕することを要求される。書物も物質的な形態を付与されるかぎりにおいて一つの工芸品であるから、それは当然用と美に奉仕すべきはずである」（595）と述べている。また、版元が「装幀芸術の大成」と新聞広告を出した谷崎潤一郎の『春琴抄』（1933）を例にとり、次のように書いている。

私ならばむしろ本文に楮を生漉きした和紙…を用いて袋綴じとし、金蒔絵黒漆塗の表紙は断然退けてもっとしなやかで強い材料を用い…書物の内容を重んじるとともに、工芸としての書物それ自身の美の完成を細心に顧慮するであろう。幾度となく愛読されても傷つきいたまない強さをいつも念頭に置くであろう。（599）

向日庵私版¹¹として刊行された『ウッズウォース博士追憶集』は、上記の寿岳の

- 10) このことを竹友は *Kobe Chronicle* (April 7, 1938) の記事で知ったと書かれているが、*Kobe Chronicle* の発行は1901年までである。その後の継続誌 *Japan Chronicle* (April 7, 1938) で該当箇所を探したところ、Woodsworth 夫妻に関する記載はあるが、Kobe Women’s Clubでの講義についての記事は見つけられなかった。
- 11) 寿岳は、独自の書物観に基づき、ウィリアム・モリスの「理想の書物」よりも「美しい書物」を自分で創ってみようとし、1932年（昭和7年）4月より、向日庵私版16点、準向日庵私版2点が刊行されている（笠原「先生と向日庵私版」1076）。

装幀理念に合致していると思われる。「わがことながら」によると、戦争へと突入する厳しい状況下において、追悼集のために準備されたのは、特別に手漉きさせた和紙の本文用紙と、同じくウッズウォース博士の教え子の一人であった倉敷民藝館長 外村吉之介とのむらきちのすけ (1898-1993)¹²⁾に頼んで入手した装幀用の葛布くずふ¹³⁾であった(928)。本文は52頁で終わっているが、序で触れたように、その後、この書物制作に関わる情報が次のように記されている。

The edition of this booklet was printed for private circulation. The hand-made paper used for the text was specially made by Yoshirō Shio of Inaba, and the get-up was done by Bunshō Jugaku of Kyoto, one of the former students of the late Dr. Woodsworth to whose memory this booklet is dedicated.

『ウッズウォース博士追憶集』の本文用紙には、鳥取県東部の因幡(青谷の日置村)で特別に手漉きをさせた因州和紙が用いられており、塩義郎¹⁴⁾の手によるものであることがわかる。また、奥付に代わる最後の頁には、“Printed in Japan at the Naigai Printing Company Kyoto”とだけ記され、印刷を請け負ったのが内外印刷株式会社(現 富山房インターナショナル印刷部)であることのみが記されている¹⁵⁾。

今、筆者の手元にある『ウッズウォース博士追憶集』の外寸を測ると、横15cm

12) 外村の著書において寿岳との交友が確認できる(11)。外村は民藝運動に深く関わった人物であり、染織家、織物の研究者でもあり、「終戦を迎えてもすぐに沖縄に帰れなかった女子挺身隊の織物の指導」にもあたったという。

13) 山野に自生する葛の繊維を織り上げた布のこと。

14) 塩義郎は、柳宗悦の編著書『妙好人因幡の源左』の限定60冊の特製本の用紙も紙漉きしている(柳『妙好人因幡の源左』240-41)。

15) 写真はコロタイプで印刷されたと思われる。但し、当時の状況などについて、有限会社富山房に問い合わせを試みたが、残念ながら、記録は残っておらず、事実関係等の詳細は知り得なかった。

×縦 24.3cm、厚さ 1 cm¹⁶⁾ で、表紙は微かな金色とも言えるような渋い薄茶色の葛布で造られている。柳宗悦が『手仕事の日本』の中で、葛布のことを「滑か^{なめら}で塵を^{とど}止め」ないため書物の装幀として適しており、「絹になく麻になく木綿にもまたない^{あじわ}味い」がある（124）と書いているが、手に取ると、実に滋味深い。表紙上部には楕円が配され、その中に眼鏡をかけたウヅウォース博士の横顔が小豆色でデザインされている（図2）。また、この書物の装幀に関しては、表紙が淡い黄色（クリーム色）の紙で造られた簡易装版がある。

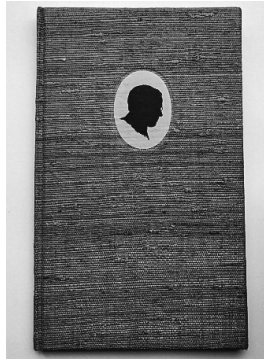


図2 葛布版表紙

本文が印刷されている和紙は、葛布版、簡易装版のいずれにおいても同じ紙が使われており、経年によるのかもしれないが、黄みを帯びている。特筆すべきは、手漉きの和紙であるため、それぞれの頁に自然な繊維の文様が浮き出ている、どの頁を繰ってみても、一葉として同じではない。このことは、葛布で覆われた表紙についても同様である。布の折目目が異なって出ているため、手元にある数冊を並べて眺めてみても、表紙の様相は全て異なっている。すなわち、等しく造られた『ウヅウォース博士追憶集』ではあるが、手漉き和紙と葛布の為せる業で、一冊として

16) 書誌等には 14・5 × 24cm となっている（笠原「寿岳文章専載本・分載本・向日庵本一覧」1045）。

同じ装幀の本は無いと言えるのである。また、65有余年もの年月を経てきた本であるために、それぞれ、保存によって状態が著しく異なり、本文和紙が部分的に変色したものや紙魚による虫害が甚だしいものもあった。一方、パラフィン紙に包まれて状態が極めて良好のものもあり、中には、本の背にタイプで打たれた書名の紙が貼られて小さな丸い金の細工が施されているものもあった。金細工は寿岳自身によるものか、本を入手した人物の手によるのかは不明だが、本の持ち主によって施されたものだと考えるのが妥当であろう。

さらに、全てが同一の書物ではないと見なすべき所以として、それぞれの書籍に黒インクの手書きで書きこまれた限定番号の存在を挙げる必要もあろう。上記に引用した書物制作に関わる情報の後に、「この版は300部限定で造られた（“The edition is limited to 300 copies”）」という一文が続く。そして、その後、限定番号が手書きで書きこまれているのである。例えば、多可町和紙博物館に寄贈された寿岳文庫¹⁷⁾の中にある、おそらくは寿岳文章が自身のために手元に残した『ウッズウォース博士追憶集』の限定番号は「第3番(“this is No. 3”）」であるという。また、竹友藻風が所蔵していた同書¹⁸⁾も、第6番とかなり早い番号が付けられている。

ならば、限定番号の何番から何番までがウッズウォース家に贈られたのだろうか。夫人の手に渡ったのは第1番であったのだろうか。筆者がこの書物について調べ始めた当初、第1番から70番、あるいは、それに近い、かなり早い番号が付けられた本が贈られたのではないかと推測した。カナダのトロント大学の図書館に所蔵されている本書2冊の番号が、第16番と75番であったからである。しかし、寿岳と竹友が所蔵していた追悼集の番号が共に一桁であったことから、寿岳を含め書物制作の企画に関わった近しい人物にまずは手渡され、その後の比較的早い番号の付

17) 寿岳夫妻の長女、寿岳章子氏により、寿岳文章が蒐集した和紙や和紙の本、和紙に関する書籍が寄贈されたものである。

18) 大阪大学総合図書館所蔵。竹友藻風の遺族より寄贈された「竹友文庫（第2期）」の一冊である（玉井2）。

されたものがカナダに贈られたのかもしれない。というのも、筆者が二桁の番号を付けられた追悼集を未だ国内で1冊しか探し得ていないからである。また、実際に確認することのできた6冊の簡易装版のうち、3冊が、いずれも第283、288、299番とかなり遅い番号であり、2冊には、番号は記されず、波ダッシュ（～）のマークのみ記入されていた¹⁹⁾。このことから、限定番号が付けられたのは300番までで、葛布版は250部程度造られ、残りの簡易装版には200番台後半の番号が付けられたのではないかと推定したい。ところが、筆者が確認できた寿岳文庫の簡易装版の番号が第181番なのである。以上のように、この問題に関しては、現段階において、確たる論拠や文献を見つけれられておらず、漠たる推測の域に留まっているに過ぎない。

ただ、そもそも、番号づけについて議論することは、ある意味、不毛なのかもしれない。私版本の限定番号に関して、寿岳が「限定本雑記」（1958）の中で次のように書いている。

購買者は自分の好きな番号を希望する…一番でなければもらわん、とかんむりをまげろお客さんは、版元にとって実のところ有難迷惑なので、これはやはり、申込み順で我慢してもらうのが、書物の道にかなってよう…一番がもらえないなら最終番をくれ、という人もずいぶん多い。自分の年齢と合致したのを所望する人も多い…三十台・四十台の同じ番号が、なんにんにも所望される。(188-89)

同時期に書かれた「限定版のこと・あれこれ」（1958）の中でも、寿岳は「同一の番号を求める数名の人が出てくる」ため、私版本制作を行うにつれ、「番号はつけないことにした」と述べているのである。

数字は、時に不思議な魔力を発揮する…また問題は、番号のつけかたである。折角神経のゆきとどいた本を造っておきながら、なんの暖かみもない番号印字器で、字体

19) 2冊のうち1冊には、本の見返しに“Presented by Mr. Jugaku, June 3, 1953”と書かれている。

もインキも選ばず、機械的にナンバリングを施したりした例を良く見かけるが、これでは台なしである…向日庵私版を始めた頃、私もいちいち番号を手書きした。しかし同一の番号を求める数名の人が出てくるので、公平を期する考えから、のちには全体の出版部数だけを標記して、いちいちの番号はつけないことにした。(184-85)

実際、寿岳自身が1947年(昭和22年)に刊行した向日庵本の一冊『エマーソン書誌』(*A Bibliography of Ralph Waldo Emerson in Japan from 1878 to 1935*)には、「500部限定(“This edition is limited to 500 copies”)」とのみ記されていて、限定番号は付けられていない。『ウヅウォース博士追憶集』は、その5年後に造られた向日庵本最後の書物である。にもかかわらず、限定番号が付けられている。むしろ、それが何ゆえだったのかを考えるべきなのかもしれない。

最後に、追悼集に明記された「限定300部」という表記が、他の文献での記載と矛盾する場合があることを指摘しておきたい。一部の書物(おそらくは、戦後の出版再企画に対し寄付をした人物宛て)に同封されたと思われる「感謝・報告・お願い」という寿岳の書面²⁰によると、350部が刊行され、アウターブリッジ院長の手を経てウヅウォース夫人へ70部送本すると報告されている。また、後述の、同時期に書かれた別の書面でも、350部のうち70部を夫人に贈呈したと記載されている。しかしながら、寿岳のエッセイ「わがことながら」(刊行年より13年後に「PHP」に掲載)においては、当初の企画は300部を印刷し、100部をウヅウォース家に贈るという案であり、100冊を届けたと書かれている(927-28)。さらに、1953年9月に記された『ウヅウォース博士追憶集』刊行記を読むと、70部を博士夫人に贈ると定めたとあるが、やはりここでも、「300部の限定版として刊行された」と書かれているのである。

20) 一枚の和紙(横34.5cm×縦24.5cm)に謄写版印刷されている。出版企画に寄付をした人々の名前と金額、御礼の言葉、そして、刊行に要した費用が詳細に記されており、残部を購入願いたい旨が書かれ、昭和28年(1953年)5月の日付が記されている。

IV. 戦争との関わり—平和を体現する書

「わが『書物』の思い出」(1976)において、寿岳は向日庵本制作について次のように述懐している。

いまふりかえてみると、私が向日庵本作成に情熱を注いだ期間は、日本国政府が英語や英文学の学徒を国賊のようにいいたし、大学の英米文学科がつつぎととりつぶされた時期にあたる。その間私は、こつこつと十数冊の限定本づくりに励み、熱心な読者に直接頒布した。出版法の規定からすれば、内務省への納本が義務づけられていたけれど、私はあえて納本しなかった。出版の自由を当然とする私の信条の、国家体制へのささやかな反抗である。(933)

私家本造りは、寿岳にとって、時局が日に日に緊迫し、日中戦争、第二次世界大戦へと突入していった流れの中での「ささやかな」、しかし決然とした「反抗」でもあったのである。

すでに触れたように、『ウヅウォース博士追憶集』の刊行は、戦争のために延期せざるを得なかった。寿岳文章は、学術振興会の「英訳万葉集」の校正時において、新村出(1876-1967)の意向でウヅウォース博士が「訳詩に検討を加えるなど、随分影の力となって日本の文化に貢献」したにもかかわらず、「敵国カナダの人というだけの理由で、戦前の出版は不可能となった」と記している²¹⁾。また、「向日庵本の思い出」(1986)を読むと、先に言及した『エマーソン書誌』についても同様の状況であったことがわかる。この本の制作は、ラルフ・ワルド・エマーソン(1803-1882)の孫であり、弟が駐日アメリカ大使であったフォーブズ兄弟から、「日本におけるエマソン文献の蒐集・書誌作成を依頼された」柳宗悦から頼まれ、寿岳が請け負ったものであった。

21) 「『ウヅウォース博士追憶集』刊行記」(7)。

当時私は紙漉村行脚の最中で、書誌作成・刊行に適当な本文用紙は入手できたので買
い求めておいたが、書誌の形をとりかけた段階では、エマソンも「鬼畜」の頭目で、
私の企ては国賊行為視され、手も足も出なかった。終戦直後、私は思惟を行動に移し、
本書刊行にとりかかったが、愚行の極み、戦争の醜悪さは、色あせかけた本書の表紙
にあとを止めている…本書と同様の受難史は『ウズワース博士追憶録』についても
綴られる。(952)

戦争は、書物制作を阻む、何よりも「恨み憎む」べく「書物の敵」であったのである
22)。この『エマーソン書誌』の表紙は深い藍色の和紙で造られているが、70年余
りの年月が経っている故もあろうが、確かに趣味の良い濃藍の色味がところどころ
少し白く褪せている感がある。さらに、戦時下の出版検閲の問題だけではない。『手
仕事の日本』の序において、柳宗悦は、「戦争はおそらく多くの崩壊を手仕事の上
に齎^{もた}らした」(5)と述べている。書物の装幀に「用と美」を求めた寿岳にとって、
戦争は、書物制作のために必要な質の高い和紙造りなどの手仕事も衰退させた「敵」
であったと言えよう。

寿岳は、「わがことながら」において、ウズワース博士が「日・独・伊三国
をファシズムが荒れ狂っていた昭和十四年に、そのファシズムを身ぶるいするほど
きらった」(927)と記している。先に引用した竹友の言葉から伺える、博士の「他
者への慈愛に満ちた眼差し」は、自国の利のため他国と争い、絶望的なまでの悲
しみや犠牲を強いる戦争と、余りにもかけ離れている。博士の実兄、カナダの政治
家 J. S. ウズワース (James Shaver Woodsworth 1874-1942) もまた、1939
年、カナダの第二次世界大戦への参戦に反対し、徹底した平和主義を貫いた人物で
ある。『ウズワース博士追憶集』の序文に、「日本の芸術規範と調和した本とな

22) ウズワース博士が講じたウルフの *The Years* の翻訳書、大澤實 (1916-68) による『歲月』
(1958) も、戦時下ゆえ、同様の出版経緯を経ている。大澤は原書が刊行された 1937 年には
翻訳の草稿を仕上げていたにもかかわらず、その後の第二次世界大戦のため、原稿は「書齋
の押し入れの中で眠り続ける」ことになったという。出版まで実に 21 年経過している。(ウ
ルフ『歲月』573)

ることは彼の願いであっただろう（“it would have been his own wish to have the book printed in harmony…with Japanese artistic standards”）」という一文がある。H. F. ウッズウォースは、カナダで生まれ、教育に一生を捧げ、日本の地に眠っている。かつて遠く太平洋に隔てられた多くの人々の博士への想い、哀悼や感謝、そして敬愛が詰まったこの小さい本（“this little work of love”）は、戦争という悲惨な時代を経て、平和を体現する書でもあるのである。

最後に、「『ウヅワース博士追憶集』刊行記」に次のような記述があることが興味深い—「やがて戦争が終わったとき、たまたま日本に進駐してゐた博士の令息から、追憶集出版の強い希望を依然として夫人が持っていられると聞き、どうあってもそれを実現しなければならぬと私は考えた」（7）。博士の子息が「日本に進駐していた」という敗戦後の事実、すなわち、ある意味、「戦争」がこの本の刊行に一役買ったとも考えられるのは皮肉なことである。

V. 結び

筆者が古書店から入手した『ウッズウォース博士追憶集』数冊の中に、上述の「感謝・報告・お願い」という書面とは異なる献本送付の手紙、そして寿岳文章の自筆署名と朱印の押された小さな和紙が挟まれている本があった²³⁾。その書面にも、戦争という「国内情勢の急変」により、『ウッズウォース博士追憶集』の刊行が許されず、「敗戦後再びこの企画が取り上げられるやうになった時には、原簿消失のためか」、振替貯金は返還されず、「日まさに物価は高騰し」、刊行責任者たる寿岳の苦慮が「並みならぬ」ものであったことが記されていた。さらに、ここにもまた、「約束」という言葉が出てくるのである。「御約束いたしました通り70部をウヅワース夫人に贈呈し、尊台にも一本をお送りする次第であります」と書面は結ばれている。

23) 縦24.2cm×横33.5cmの大きさの和紙を用い、「感謝・報告・お願い」と同じく、謄写版印刷で書かれている。自筆署名の紙は、縦14.5cm×横5cmの大きさである。

この追悼集は、ウッツウォース博士の伝記であるのだが、言うまでもなく、寿岳文章の思想や美意識、人柄、書物造りへの強い意志を具現する書でもある。「『ウッツウォース博士追憶集』刊行記」には次のように書かれている。

私はただ、辛うじて約束を守っただけの話である… ただ一つの真実を行ったまでのことなのである。しかし、そうした真実が、書物を受けとった人々の胸に伝わり、過分の感謝が私へ寄せられたことはさすがにうれしい。わけてもウッツウォース夫人の喜びは深く、その一事のためだけにでも私は仕事のやり甲斐を感じた。(7)

また、寿岳を含め、多くの教え子、友人等の手紙もまた、彼ら自身やウッツウォース博士への思いを物語る。そして、前述したように、寿岳によって造られた書物一冊一冊の現在の有り様が、70年近い年月の間にそれぞれの書物が辿ってきた経緯、その持ち主へと思いを馳せさせるのである。

筆者は、今回、限られた時間の中でこの小さな書物をできるだけ多く探すことを試みた。しかし、短い時間であったため、実際に手に取ることができたのは僅かに17冊、国内での所在を確認できたのは、およそ35冊のみであった²⁴⁾。ウッツウォース夫人に贈られた70部以外に、「英文の書物なので、海外の知友にも送った」²⁵⁾と記載があるので、国内に何冊現存しているのかは不明であるが、本の行方を辿る試みの中で、興味深い事実を得ることも多かった。例えば、外村吉之介との繋がりから、可能性のありそうな倉敷民藝館には所蔵記録が無く、一方、意外な場所で保管されていることがわかったのである。京都大学理学研究科宇宙物理学教室の「山本天文台資料目録」²⁶⁾の中に書名があった。限定版の向日庵本、『ウッツウォース博士

24) 関西学院大学図書館、ならびに学院史編纂室、多可町和紙博物館寿岳文庫、国立国会図書館、および、国会図書館布川文庫、上掲の大阪大学などの大学図書館、古書店など。

25) 一例として、エドモンド・ブランデン(1896-1974)から、賞賛と感謝の意を表す手紙が来たことが書かれている。「『ウッツウォース博士追憶集』刊行記」(7)。

26) 元京都大学理学研究科宇宙物理学教室助教 富田良雄氏が、山本一清博士の蔵書を整理し、作成されたもの。

追憶集』の一冊は、京都大学の山本一清^{いっせい}博士（1889-1959）の手に渡り、現在、京都大学大学院理学研究科附属花山天文台が所蔵している。この事実は、山本一清博士がかつて『関西学院新聞』に寄稿していたこと、また、W. M. ヴォーリズとも深い繋がりがあり、さらには寿岳文章とも知り合いであったということを教えてくれた。和紙で造られた小さな書物が広遠なる宇宙を研究する天文台に所蔵されているというのは、何とも感慨深い。

寿岳は、自らの造った書物を「どれにも甲乙はなく、言わばみな血を分けたかわい子供」と言い表している（「限定版のこと・あれこれ」185）。かつて紙漉き村を訪ねて旅をした寿岳夫妻、また、名も無き職人の創る美を捜し歩いた柳宗悦が果敢にやり通した調査・蒐集の偉業に少しでも近づくことなど叶うべくもないが、調べれば調べるほど、国内に存在するはずの200部余りの一冊一冊がひっそりと眠る処へ実際に足を運び、その本を手にとってみたいという願いが強くなるのである。

本稿は、残念ながら、不十分な時間の中での考察となった。また、浅学ゆえ、誤った記述や解釈が少なからず含まれていると思われる。序で触れたように、この小さな「約束の本」が語ることは、極めて奥深く、広範囲に及ぶ。調べ始めると、奇縁と言うべきか、筆者がかつてお教えを受けた恩或る方々、また、縁ある場所とも繋がっていった。周知のとおり、寿岳文章の著作物は大層多く、今回の研究ノートに関連する文献に限っても、全てに目を通すことができなかった。苦心して調べたけれど言及できなかった事柄も多い。今後、時間をかけて更に調べ、関係各位にご教示を頂きながら知見を深め、再度、新たな論考の形にまとめたいと考えている。

参考文献

- ウルフ、ヴァージニア『歲月』大澤實訳、文遊社、2013年。
- 笠原勝朗編「寿岳文章専載本・分載本・向日庵本一覧」『壽岳文章書物論集成』、1031-45頁。
- 。「先生と向日庵私版」『壽岳文章書物論集成』、1076-78頁。
- クランメル、ジャン・W. 編『来日メソジスト宣教師事典 1873-1993年』教文館、1996年。
- 志賀勝「ウヅワース先生追想録—“In Memoriam H. F. Woodsworth”」〔関西学院大学英米文学会会報 創刊号〕1953年、『英米文学会会報 復刻版』関西学院大学英文学会、2014年、2頁。
- 寿岳文章「『ウヅワース博士追憶集』刊行記」『日本古書通信』第18巻第15号、1953年10月15日、7頁。
- 。「限定版のこと・あれこれ」『本の話』、182-86頁。
- 。「限定本雑記」『本の話』、186-91頁。
- 。「向日庵本の思い出」『壽岳文章書物論集成』、949-61頁。
- 。「作家と装幀」『壽岳文章書物論集成』、594-603頁。
- 。『壽岳文章書物論集成』沖積舎、1989年。
- 。『書物』タングラム、1987年。
- 。『本の話』白鳳社、1964年。
- 。「わがことながら—十二年ぶりにつくりあげた約束の本」『壽岳文章書物論集成』、927-29頁。
- 。「わが『書物』の思い出」『壽岳文章書物論集成』、933-37頁。
- 。『*A Bibliography of Ralph Waldo Emerson in Japan from 1878 to 1935.*』Sunward Press、1947年。
- 。『*In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D.D.*』向日庵私家本、1952年。
- 寿岳文章・しづ『ある夫婦の記録—寿岳文章・しづ著作集 2』春秋社、1970年。
- 。『紙漉村旅日記他—寿岳文章・しづ著作集 5』春秋社、1970年。
- 新村出「モリスを憶ふ」『モリス記念論集』モリス生誕百年記念協会、1934年、11-16頁。
- 竹友藻風『鶴鶴』七丈書院、1942年。
- 玉井暉「『竹友文庫』と『藤井文庫』」『大阪大学図書館報』第35巻第4号（通巻142号）、2002年、1-2頁。
- 外村吉之介『喜びの美・亡びの美—民藝六十年』講談社、1988年。
- 中島俊郎「ある英文学者の肖像」『甲南大学紀要 文学編』第162号、2012年、31-45頁。
- 西村美香「寿岳文章の書物工芸」『アーツ・アンド・クラフツと日本』思文閣出版、2004年、141-52頁。
- 藤井治彦「竹友藻風小伝」『竹友藻風選集』第2巻、南雲堂、1982年、559-74頁。

- ブレイズ、ウィリアム『書物の敵』高宮利行監修、高橋勇訳、八坂書房、2004年。
- 柳宗悦編『妙好人因幡の源左』大谷出版社、1950年。
- 『手仕事の日本』岩波書店、1985年。
- 山本一清「今秋の星」『関西学院新聞』第177号、1931年9月20日、4頁。
- 「ウッズワース Woodsworth, James Shaver」フランク・B・ギブニー編、『ブリタニカ国際大百科事典 1 小項目事典』ティビーエス・ブリタニカ、1972年、597頁。
- 「五十週年祭を控えてウッツウオース部長突如逝く」『関西学院新聞』号外、1939年2月8日。
- McNaught, Kenneth. *A Prophet in Politics: A Biography of J.S. Woodsworth*. U of Toronto P, 2001.
- Woodsworth, H. F. “My Early Recollections of Kwansei Gakuin”『関西学院文学部同窓会報—文学部創立二十五周年記念号』関西学院文学部同窓会、1937年、1-2頁。
- Woolf, Virginia. *The Years*. Edited by Hermione Lee. The World's Classics. Oxford UP, 1992.
- 倉敷民藝館HP「初代館長外村吉之介」<http://kurashiki-mingeikan.com/about.html>(2019年1月30日アクセス)

【謝辞】

W. M. ヴォーリズについて調べるために関西学院大学学院史編纂室を訪ねた筆者に、『ウッツウォース博士追憶集』を手取ることを勧めて下さったのは、学院史編纂室専任主管の池田裕子氏であり、今回、多大なるご助力を頂いた。また、前関西学院大学学長 井上琢智先生をはじめとして、多くの方々にご教示を賜り、倉敷民藝館、京都大学理学研究科宇宙物理学教室図書室、多可町和紙博物館寿岳文庫、日本民藝館など、関係各所の方々には、こちらの不躰な問い合わせに対し、大変丁寧にご対応を頂いた。記して感謝の意を表したい。